

東京女子大学大学院博士前期課程

2025年度外国人留学生

入学試験問題

人間科学研究科 人間社会科学専攻

グローバル共生社会分野

専門科目(解答用紙2枚)

日本語(小論文)(解答用紙1枚)

グローバル共生社会分野は、専門科目について
外国人留学生入試と一般入試(1月期)で共通問題のため
専門科目を参考としてください

※

※記入しないこと

受験
番号

留専

東京女子大学大学院(博士前期課程)

2025年度 外国人留学生入学試験

人間科学研究科 人間社会科学専攻 グローバル共生社会分野 専門科目 試験問題

1/1

以下の問題から2題を選んで解答しなさい。2題のうち少なくとも1題は、入学後に研究を計画している領域の問題を選ぶこと。解答にあたっては、1題につき1枚の解答用紙を用い、問題番号を冒頭に明記してください。

【問題1】 国際紛争解決メカニズムについて、政治的紛争と法律的紛争を区別したうえで、具体的事例に触れながら論じなさい。

【問題2】 アメリカにおけるポピュリズムについて、歴史的な展開、現在の状況、政治学における議論など、幅広い観点から論じなさい。

【問題3】 長期的視点で見た円レートと日本経済の関係について論じなさい。

【問題4】 米国による輸入関税引き上げの影響が注目されている。輸入関税の引き上げは経済に対してどのような影響を与えるのか。輸入関税引き上げによる輸入国、輸出国、そして国際経済全体への影響を消費者、生産者、政府の視点に留意しつつ論じなさい。

【問題5】 社会的孤立というテーマに関して、社会学の立場から、どのように研究することが可能だろうか。少なくとも三つの異なるアプローチ法を挙げ、それぞれの利点と欠点を指摘したうえで、あなたならどう研究を行うか、なるべく詳しく説明しなさい。

【問題6】 社会学研究における比較の意義について、具体的な事例を紹介しながら、説明しなさい。

【問題7】 グローバルな観点から、共生の課題をひとつ取り上げ、その課題の現代社会における重要性、歴史的背景、現状と問題点、今後社会が進むべき方向性などを、ジェンダーの視点を交えてなるべく具体的に論じなさい。

東京女子大学大学院(博士前期課程)

2025年度 外国人留学生入学試験

人間科学研究科 人間社会科学専攻 グローバル共生社会分野 日本語(小論文)

試験問題

1/1

以下の文章は鶴見俊輔『思い出袋』の一節である。文章を読み、鶴見良行の著述スタイルの変化とその背景を、筆者がどのように捉え、考察しているか説明しなさい。文章の記述をそのまま引用するのではなく、文章から読み取れる内容をできるだけあなた自身の言葉を使って説明すること。

言葉にあらわれる洞察

私よりも若く、早くなくなつた鶴見良行の著作集(全十二巻、みすず書房、一九九八―二〇〇四年)を読んで、見えてくるものがあつた。

彼は日本の外交官の長男としてロサンゼルスに生まれ、米国籍をもっていた。二重国籍をもつたまま日米戦争をくぐり、敗戦後二十歳に達して、自分の意志で米国籍を捨てた。彼は日本国を、自分の意志で選んだ。

英語はうまかつた。彼が文章を書きはじめたころ、その論文は、やがてアメリカの大学に留学して、博士論文として出しても通るような形をそなえていた。明治・大正・昭和戦前・戦後の家族アルバムの比較分析などは、それまでの日本の社会学になつた新しい研究であり、アメリカでも新しい論文として迎えられたらう。

国際文化会館の企画課長として勤務し、同時に声なき声の会、ベ平連の市民運動に参加していたころの彼は、もの書きとしては、まだアメリカの学問のスタイルに属していた。しかし、著作集の終わりの二巻にあたるフィールドノートでは、もはやアメリカの学会に発表される論文には向かつていない。

記録は今日の足跡を記すことを最終目的とする。フィリピン、インドネシア、マラッカで、エビ、ナマコ、ヤシの実の取得と売り買いの現場を歩き、その日の見聞をその日のうちに日記に書くことの積み重ねから、眼のつけどころが青年時代とかわり、文体も目線にあわせてかわっていく。すでに初老の域に入つて、食材を自分で選び、自分で夕食を調理

する、その残りの時間に日記を書く。見聞を記録するのは、気力であり、気力は、見聞に洞察を加える。*アキューメン(acumen)という言葉は私に思い出し、この言葉をこれまで自分が使つたことがないのに気づいた。

知っていることは知つていた。何年も前にサンタヤナ自伝を読んだとき、十九世紀の高名な、しかし平板な哲學家パーマーについて、英文学部のノートンが、あの人はアキューメンを欠いている、と批判したくだりがあつた。ノートン自身はアキューメンをもっていると自負していた。現に、私のいたころのハーヴァード大学で全新生に課せられていた毎週七百五十語の作文という形をはじめた人で、それを教師が毎週批評することを通して、表現におけるアキューメンの大切さを教えようとしていた。私も恩恵を受けている。

日本の大学教育に、その場所があるか。

とにかく鶴見良行は、フィールドノートに、毎日の見聞を統括するアキューメンの働きを見せている。それは、彼の想像力の中でおこなわれた、米国に支配される日本から、アジアの日本へという舵の切り替へだつた。

* acumen: keen perception. *Oxford Little Dictionary*.